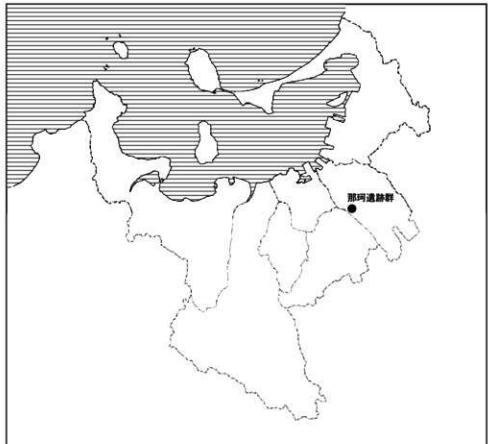


那珂 58

那珂 58



道路略号 NAK-127
道路調査番号 1006

2011

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため、市内各所には、歴史的遺産が数多く残っています。本市は、これらを後世に残し伝え、市民の皆さんに活用していただくために、その保護と活用に取り組んでいるところであります。

福岡市教育委員会では、こうした取り組みの一環として、開発にともないやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存につとめています。

本書は、那珂中央公園整備工事にともない発掘調査を実施した、那珂遺跡群第127次調査の成果を報告するものです。本調査では、弥生時代・中世を中心としたさまざまな遺構が発見されました。これらは、当時の地域の歴史を知る上で貴重な資料となるものです。本書が、市民の皆さん文化財保護への理解を深める一助となると共に、学術研究にも貢献する資料となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心からの謝意を表します。

平成23年3月18日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例言

1. 本書は博多区竹下5丁目地内における那珂中央公園整備工事に先だって、福岡市教育委員会が平成22年度に発掘調査を実施した那珂遺跡群第127次調査の調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集は松尾奈緒子が行った。
3. 本書で使用した方位はすべて磁北であり、真北より6°40' 西偏している。
また、本書における座標は、国土地理院第2系を用いている。
4. 本書で用いた遺構の呼称は、溝をSD、井戸をSE、土坑をSK、ピットをSPと略号化している。
5. 本書に掲載した遺構実測図の作成は平川敬治・松尾が行い、製図は松尾が行った。
6. 本書に掲載した遺物実測図の作成は平川敬治・松尾が行い、製図は松尾が行った。
7. 本書に掲載した遺構・遺物の写真撮影は松尾が行った。
8. 入輸陶磁器については以下の文献の分類を参考にし、佐藤一郎氏のご教示を得た。
太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集
9. 石器については板倉有大氏のご教示を得た。
10. 本書に関わる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管・公開される予定である。

本文目次

第1章 調査の経過と方法	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査体制	1
第2章 遺跡の地理的歴史的環境	2
(1) 那珂遺跡群の位置と周辺遺跡	2
(2) 127次調査地点の位置と那珂遺跡群のこれまでの調査	4
第3章 調査の記録	7
(1) 調査の概要	7
(2) 遺構と遺物	10
a. 弥生時代の遺構と遺物	10
b. 古代・中世の遺構と遺物	13
① 土坑	13
② 井戸	15
③ 溝	17
c. そのほかの遺物	24
第4章 まとめ	26

挿図目次

[図]

Fig. 1	調査区周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	3
Fig. 2	那珂遺跡群のこれまでの調査地点 (S=8,000)	5
Fig. 3	周辺の調査地点 (S=1/3,000)	6
Fig. 4	調査区位置図 (S=1/800)	7
Fig. 5	調査区南壁土層図 (S=1/40)	8
Fig. 6	遺構配置図 (S=1/200)	8
Fig. 7	SK0平面図・断面図 (S=1/20)・出土遺物実測図 (S=1/3)	10
Fig. 8	SK05平面図・断面図 (S=1/20)	11
Fig. 9	SK0平面図・断面図 (S=1/20)	11
Fig. 10	SK05出土遺物実測図 (S=1/3)	11
Fig. 11	SK09平面図・断面図 (S=1/20)・出土遺物実測図 (S=1/3)	12
Fig. 12	SK12平面図・断面図 (S=1/20)・出土遺物実測図 (S=1/2)	13
Fig. 13	SK10平面図・断面図 (S=1/20)・出土遺物実測図 (S=1/2)	13
Fig. 14	SK13平面図・断面図 (S=1/20)・出土遺物実測図 (S=1/3)	14
Fig. 15	SK48平面図・断面図 (S=1/20)・出土遺物実測図 (S=1/2)	14
Fig. 16	SE08平面図・断面図 (S=1/30)	16
Fig. 17	SE55平面図・断面図 (S=1/20)・出土遺物実測図 (S=1/2)	16

遺跡調査番号	1006		遺跡略号	NAK-127	
所在地	博多区竹下5丁目地内		分布地図番号	38-0085	
開発面積	1,563 m ²	調査対象面積	306 m ²	調査面積	434 m ²
調査期間	平成22年4月19日～平成22年6月15日		事前審査番号	20-1-199	

Fig.18	SD01 平面図・断面図 (S=1/40)	18
Fig.19	SD01 および SD01・02 檜出面出土遺物実測図 (S=1/2)	19
Fig.20	SD02 南半・SD03 平面図 (S=1/80)・断面図 (S=1/40)	20
Fig.21	SD02 出土遺物実測図 (S=1/3)	21
Fig.22	SD03 出土遺物実測図 (S=1/3)	23
Fig.23	SD02 北半・SD14 平面図 (S=1/80)・断面図 (S=1/40)	23
Fig.24	SD14 出土遺物実測図 (S=1/2)	24
Fig.25	そのほかの出土遺物実測図 (S=1/1・1/3)	25
Fig.26	中世後期における周辺構造配置図 (S=1/3000)	27

[写真]

Ph.1	調査区全景 西から	9
Ph.2	調査区南側から 114 次調査地点をのぞむ	9
Ph.3	SK04 西から	10
Ph.4	SK05 南西から	11
Ph.5	SK06 南から	11
Ph.6	SK48 北から	14
Ph.7	SE08 西から	15
Ph.8	SD01 北から	18
Ph.9	SD02 土層断面 北から①	20
Ph.10	SD02 土層断面 北から②	20
Ph.11	SD02 南半 北から	21
Ph.12	SD02 北半 南から	21
Ph.13	SD02 土層断面 北から③	23
Ph.14	SD02 土層断面 北から④	23

第1章 調査の経過と方法

(1) 調査に至る経過

福岡市教育委員会は、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存をはかるため、開発事業に対する事前審査を行い、開発により埋蔵文化財が失われる場合には記録保存のための緊急発掘調査を実施している。平成21年3月18日、福岡市博多区竹下5丁目地内において実施される那珂中央公園整備工事にさきだって、住宅都市局公園緑地部公園建設課から、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課に対して、埋蔵文化財の事前審査依頼が提出された（事前審査番号 20-1-199）。これをうけて、埋蔵文化財第1課は、申請地が周知の埋蔵文化財抱置地である那珂遺跡群に位置しており（分布地図 37-38-0085）、かつ周辺で過去に数度の発掘調査を行っていたことから、遺跡が存在する可能性が高いと考え、確認調査の実施が必要である旨を回答し、同年3月25日に確認調査を実施した。確認調査では、地表下45cm～50cmで遺物包含層を確認し、地表下60cm～80cmで弥生時代から中世にいたる遺構・遺物を検出した。この結果に基づいて、住宅都市局と埋蔵文化財第1課は協議を行い、遺跡の存在が予想される部分を対象として、記録保存のための発掘調査を令達事業として実施することで合意した。発掘調査は平成22年4月19日から同年6月15日まで実施し（調査番号 1006・遺跡番号 NAK-127）、整理作業と報告書の刊行も平成22年度に行なった。

(2) 調査体制

調査委託： 住宅都市局公園緑地部公園建設課

調査主体： 福岡市教育委員会

調査総括： 埋蔵文化財第2課 課長 田中 齊夫

調査第1係長 米倉 秀紀

調査庶務： 埋蔵文化財第1課 管理係 井上 幸江

事前審査： 埋蔵文化財第1課 事前審査係 阿部 泰之

調査担当： 埋蔵文化財第2課 調査第1係 松尾奈緒子

調査作業： 石川洋子 上野照明 内野信代 大庭智子 小野千佳 小野山次吉 唐島栄子

草場恵子 許斐拓生 豊丸秀仁 水田とみ子 中村桂子 野口リウ子 服部弘勝

結城フヂ子

整理作業： 宮崎由美子

(五十音順・敬称略)

なお、発掘調査作業から報告書作成にいたるまで、住宅都市局の方々をはじめ地域住民等関係各位には多大なご協力とご理解をいただきました。記して感謝する次第です。

第2章 遺跡の地理的歴史的環境

(1) 那珂遺跡群の位置と周辺遺跡

福岡平野は、那珂川・御笠川の沖積作用によって形成された沖積低地と、阿蘇山起源のAso-4火砕流によって形成された平坦な洪積台地からなる。このうちの洪積台地は、河川開析をうけて分断されながらも福岡平野を縦断するようにひろがっており、福岡市博多区博多駅南から那珂、南区五十川、井尻、寺島、春日市須玖、下白水をへて那珂川安徳にのびる台地と、福岡市博多区板付から諸岡、麦野、元町をへて春日市春日原に達する台地の、2つのままで分けることができる。福岡平野の人々は、古くから、このような洪積台地を拠点として生活をいとなんできた。このため、これらの台地上には、歴史的に重要な集落遺跡が数多く展開している。那珂遺跡群は、このような洪積台地上に展開する集落遺跡のうちの1つである。

那珂遺跡群は、福岡平野の北部に位置し、比恵遺跡群とともに、東西約800m、南北約2400mをはかる細長い独立台地上に立地している。台地は、南端の最高所で10.4m、北端で5m前後をはかり、途中起伏をへながら北へゆるやかに傾斜している。中央部には鞍部があるため、福岡市では、この鞍部を境として、北側の遺跡を比恵遺跡群、南側の遺跡を那珂遺跡群と呼んでいる。しかし、この鞍部は中世以降の水田開発によるものの可能性が指摘されており、那珂遺跡群と比恵遺跡群の間には、遺跡の性格や時期的変遷などの多くの共通点があることから、那珂・比恵遺跡群として一括して議論することが多い。

このような那珂・比恵遺跡群がひろがる独立台地の東・西には、御笠川・諸岡川と那珂川が北流している。西側では那珂川によって台地がかけられ段丘崖をなし、氾濫原を形成するため、広く遺跡の空白地帯となっている。東側も同様に御笠川によって台地が削られているものの、河川そばまで遺構が検出されるところから、本来は台地が東側まで広がっていた可能性が想定されている。御笠川のさらに東方にひろがる沖積低地では、生産遺跡である東比恵三丁目遺跡や東那珂遺跡、那珂君体遺跡が立地している。また、北側も、低湿地を挟んで博多遺跡群が展開する砂丘へとつなづく。一方、那珂・比恵遺跡群の南側では、鞍部を介して五十川遺跡が展開する台地に連なっており、五十川遺跡以南にも、小規模な谷を挟んで井尻B遺跡、須玖遺跡群が展開する。

このような那珂遺跡群の周辺遺跡のなかで、とくに注目されるのは、那珂・比恵遺跡群が立地する台地から南方の春日丘陵にかけて立地する、須玖遺跡群や井尻B遺跡である。とくに、須玖遺跡群は、弥生時代中期前半から後期にかけてピークを迎える集落で、丘陵部では集落や墳墓群だけでなく青銅器埋納遺構や環濠が検出され、低地部では青銅器・ガラス製品鋳造関連遺物が多数出土するなど、ほかの集落にはない特異なあらわしが知られており、弥生時代の福岡平野にあった奴国の中核と指摘されている。また、井尻B遺跡は、青銅器・ガラス製品生産関連遺物などが出土する遺跡として、須玖遺跡群の衰退期である弥生時代終末頃にピークを迎える遺跡で、同時期に大集落に発展する那珂・比恵遺跡群と関係づけて議論される遺跡である。古墳時代中期以降は、那珂・比恵遺跡群と同じように低迷するが、その後、大宰府が成立する7世紀末～8世紀初頭になると、台地中央部において、井尻磨寺と指摘される寺院遺構や官衙遺構が検出されるようになり、再びピークを迎える。8世紀代には、井尻B遺跡の南側に古代官道木城西門ルートが整備される一方で、井尻遺跡北半では、郡衙があったと想定されている那珂遺跡群方面に延びる道路遺構が検出されており、注目されている。

[参考文献]

田崎博之 1988年「福岡平野における弥生時代の土地覆被の利用と開拓」『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会



1. 那珂遺跡群 (■は調査地点) 2. 上臼井遺跡 3. 席田青木遺跡 4. 久保原遺跡 5. 席田大谷遺跡 6. 吉塚遺跡
7. 博多遺跡群 8. 東比恵三丁目遺跡 9. 宿居遺跡 10. 東那珂遺跡 11. 那珂君体遺跡 12. 板付遺跡 13. 高畠遺跡
14. 山王遺跡 15. 北比恵遺跡 16. 五十川遺跡 17. 諸岡B遺跡 18. 諸岡A遺跡 19. 井尻A遺跡 20. 三氣遺跡
21. 佐原遺跡 22. 井尻C遺跡 23. 井尻B遺跡 24. 横谷遺跡 25. 三宅C遺跡 26. 大橋E遺跡 27. 三宅B遺跡
28. 野間E遺跡 29. 野間A遺跡 30. 中町A遺跡 31. 大橋A遺跡 32. 大橋D遺跡 33. 大橋C遺跡 34. 三宅A遺跡
35. 大橋B遺跡 36. 和田田藏道遺跡 37. 若久B遺跡 38. 若久A遺跡

Fig.1 調査区周辺遺跡分布図 (S = 1/25,000)

(2) 那珂遺跡群のこれまでの調査と127次調査の位置

那珂遺跡群ではこれまで130次にわたって調査が行われ、比東遺跡群とともに、弥生時代中期後半・古墳時代前期・古代前半にピークを迎える、福岡平野を代表する大規模遺跡であることがわかつてきている。

那珂遺跡群が立地する台地は、旧石器時代から利用をうけていたことが確認されているが、縄文時代を通じて人の生活の痕跡はみとめられず、低い台地上に繁茂した森林は、狩獵・採集の対象として利用されていたと考えられる。

那珂遺跡群において遺構が検出されるようになるのは、縄文時代晩期末葉以降である。これは、人々が、水稻農耕の開始とともに、耕作地である沖積低地に面する台地縁辺を選地して集落を営み始めるためであり、那珂遺跡群だけでなく、比東遺跡群においてもこのような現象がみられる。とくに、那珂遺跡群では、台地南西部に位置する37次調査において、縄文時代晩期末葉の二重環濠が確認されており、注目される。

このように台地縁辺に散発的に発生した水稻農耕開始期の集落は、弥生時代中期になると、台地中央部に進出し、弥生時代中期後半には大集落に発展して最初のピークを迎える。当該期には台地中央部を中心として、台地を東西に横断する大規模な区画溝や大型掘立柱建物、墳丘墓などの特殊な構造が確認されている（20・21・22・114次調査など）。

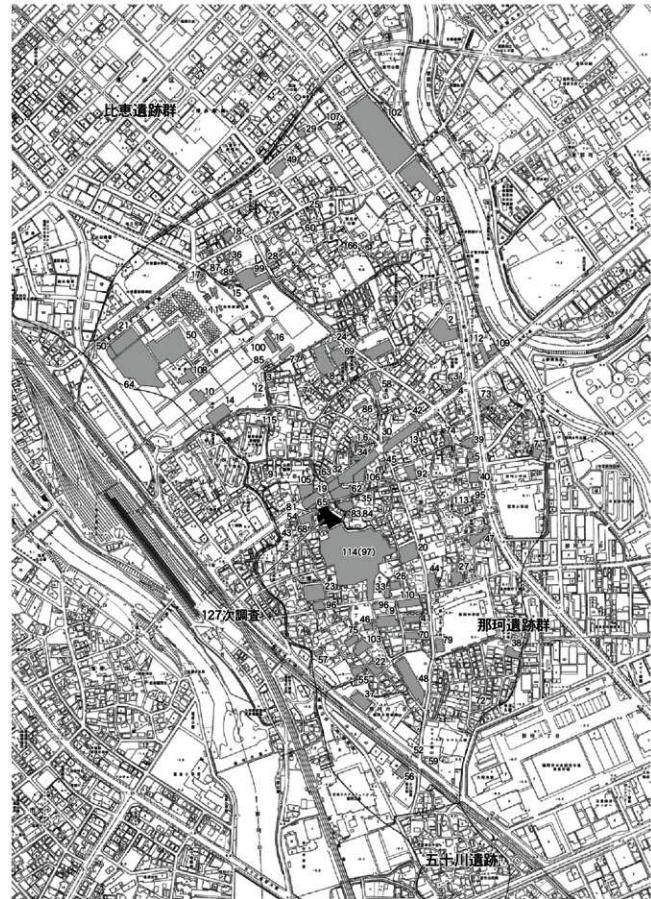
そして、弥生時代後期には一時的な衰退期を経験するものの、奴国の中核ともいわれる福岡平野南部の須須遺跡群がおこる。弥生時代終末頃には入れ替わるように再びピークを迎える。古墳時代前期まで機能したとおもわれる道路遺構が1.5kmにわたって台地を縱断し、これと那珂八幡古墳を中心とした計画的な墓域・集落域の配置がみとめられるようになる（114次調査など）。

やがて、5世紀～6世紀になると再び集落規模は縮小するが、世紀中盤に東光寺剣塚古墳が造営されたことを契機として再度集落は拡大し、7世紀代まで最後のピークを迎える。7世紀初頭には、6世紀後半に発展した集落にとってかかって、倉庫とみられる掘立柱建物群がもうけられる現象が確認されており、初期瓦などの出土とあわせて、官衙関連施設の造営が推測されている。このような動きは7世紀中頃以降もつづき、多重柵列や大型掘立柱建物群に加えて正方位の溝が多数発見されており、那珂郡衙がおかれた可能性も指摘されている（22・23・37・68・114・115次調査など）。

その後、中世を迎えると、福岡平野の中心は内陸部から沿岸部の博多遺跡群にうつり、那珂遺跡群は弥生時代へ古墳時代に比較すると、遺構密度は薄い状況となる。しかし、14世紀から16世紀にかけては、台地各所で大きな溝がはりめぐらされる状況が確認されており、室町時代から戦国時代における大内氏・大友氏家臣団の知行地化との関連が想定されている（19・105次調査など・Fig.6）。

本書で報告する127次調査は、那珂遺跡群の中央部、那珂八幡宮古墳の南東側に位置する。南側には、弥生時代中期後半を中心とする甕棺墓群や弥生時代終末期の道路遺構、古墳時代前期の円墳などが検出された114次調査、東側には、古墳時代前期の前方後方墳が検出された62次・83次・84次調査、西側には、6世紀後半～7世紀初期の大型掘立柱建物が検出された68次調査、北側には、中世後半の大溝や地下式土壙などを検出した19次・105次調査などがある。

127次調査の着手前には、このような114次調査5区・81次・19次・105次調査の結果をふまえ、中世を中心とする遺構の検出が予想された。

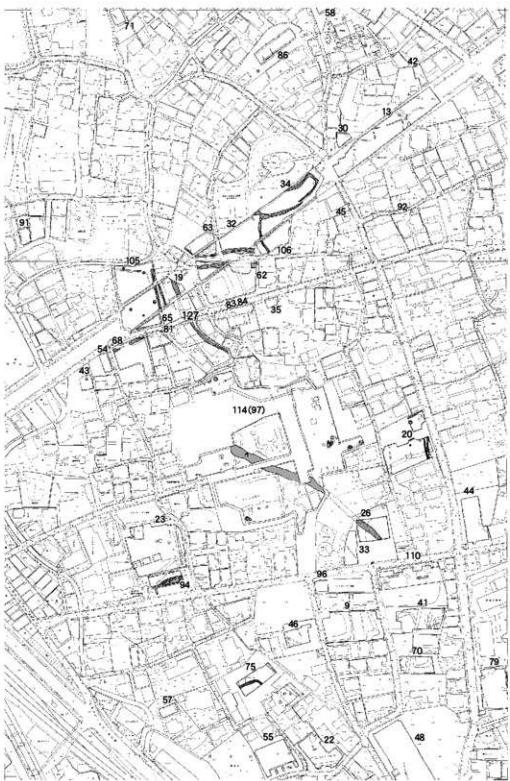


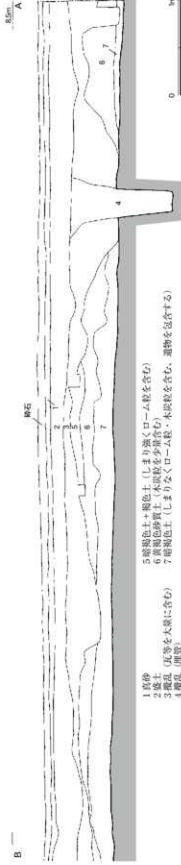
第3章 発掘調査の記録

(1) 調査の概要

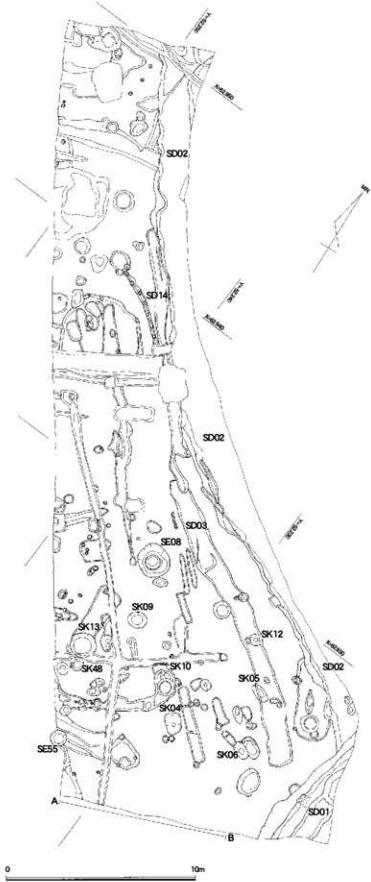
発掘調査は平成22年4月19日より開始し、公園整備工事によって遺跡が破壊される範囲を対象として、重機による表土剥ぎから着手した。遺構面上層には暗褐色包含層が堆積していたが、遺構が検出されず、遺物もごく少量しか含まれていないことを考慮して重機によって除去し、鳥栖ローム層上面を遺構面とした。4月21日からは作業員を投入して遺構検出・遺構掘削を行い、検出された遺構には性質に関係なく01から連続する番号を付与して記録をとった。6月3日に全景写真撮影を行った後、重機による埋め戻しおよび機材撤収を終え、平成22年6月15日に調査を完了した。

遺構面の標高は南端で7.2m、北端で6.7mをはかり、調査区内において南から北へゆるやかに傾斜する。本調査地点は、以前は宅地として利用されていたため北側を中心に擾乱が顕著で、遺構の残存状況は良くない。また、本調査地点は周辺よりも低い地形にあったことから、そもそも遺構密度はうすかったようである。このため、検出できた遺構は周辺調査区に比べて少なく、そのほとんどは調査区南半に集中している。代表的なものとしては、弥生時代の土坑5基、中世の土坑2基・井戸2基・溝4条が挙げられる。遺物は、これらの遺構を中心に、弥生土器・土師器・須恵器・輸入陶器・黒曜石片などコンテナクース2箱分が出土した。





1 黄沙
2 基土
3 黄土
4 淤泥
5 黄褐色+腐泥土+木本樹を含む
6 黄褐色+腐泥土+木本樹を含む
7 黄褐色土 (しりなりロード段・水深を含む)
8 黄褐色土 (しりなりロード段・水深を含む)



(2) 遺構と遺物

a. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、土坑5基を検出した。

このうちSK04は形状から柱穴と考えられ、SK05・SK06は用途不明であるが、同じ性格を有すると考えられる土坑である。

SK04 (Fig.7・Ph.3)

調査区の南半中央に位置する立柱遺構である。弥生時代中期後半に位置付けられる。

標高7.4m前後で検出し、北西・南東方向に長軸をもつ隅丸長方形のプランをなす。長さ1.15m、幅0.85m、検出面からの深さは1.1mをはかる。

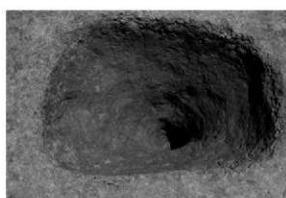
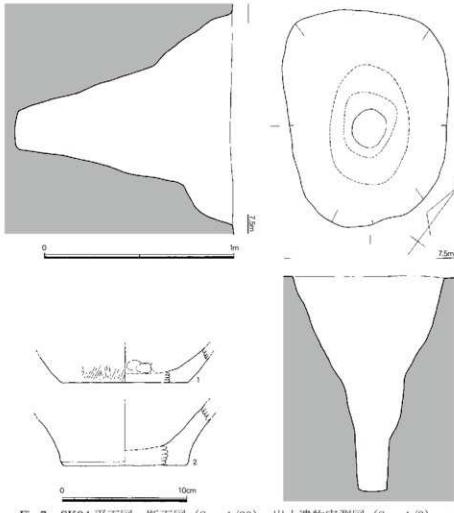
検出後、0.3mほど掘り下げる柱痕跡の検出を試みたが確認できなかつたため、そのまま掘削した。掘形は、検出面から0.6mの深さまで平坦面をつくることなく緩やかにすぼまり、そこから角度を急峻にしてさらに0.5mほど下がって円形の底面に至る。底面の大きさから、柱の直径は0.2mに復元できる。埋土はローム粒を含むかたくなった黒色土である。

周辺に同じ規模・埋土の柱穴ではなく、単体であることから、立柱遺構として報告するものである。

[SK04 出土遺物 (Fig.7)]

弥生土器のみ出土した。

図示したもののはいずれも底部片で、1は壺、2は甕。ともに摩滅が著しく、調整痕は観察できない。



Ph.3 SK04 西から

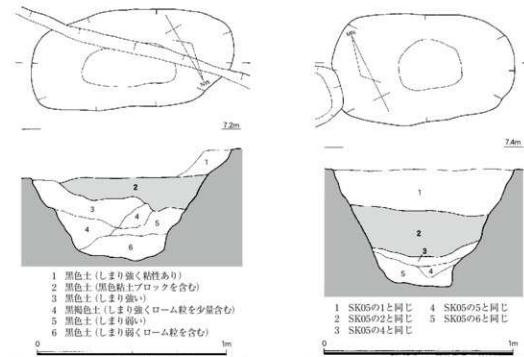
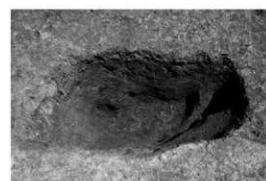


Fig.8 SK05 平面図・断面図 (S = 1/20)



Fig.9 SK06 平面図・断面図 (S = 1/20)



Ph.4 SK05 南西から



Ph.5 SK06 南から

SK05 (Fig.8・Ph.4)

調査区の南半東よりに位置し、上面をSD03にきられる。弥生時代中期後半の土坑である。標高7.1m前後で検出し、東西方向に長軸をもつ隅丸長方形のプランをなす。長さ1.05m、幅0.5m、深さ0.6mをはかる。

[SK05 出土遺物 (Fig.10)]

弥生土器のみ出土した。摩滅が著しいため調整等は観察できないものが多い。1は丹塗磨研された壺である。胴部上半の境界に三角突帯をはりつける。袋状口縁蓋か。2は須玖II式の鈎形口縁をもつ甕である。3は高杯で内外面に丹塗磨研を施す。

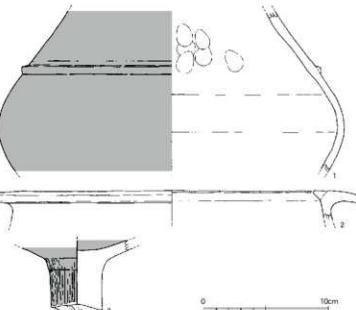


Fig.10 SK05 出土遺物実測図 (S = 1/3)

SK06 (Fig.9・Ph.5)

SK05の南側に位置する土坑である。西側を別の遺構にきられる。標高7.3 m前後で検出し、SK05と同じ東西方向に長軸をもつ隅丸長方形のプランをなす。長さ0.96 m、幅0.6 m、深さ0.6 mをはかる。底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかにたちあがる。弥生土器の細片が出土したが、図化し得ない。

SK05・SK06

SK05およびSK06の埋土は、しまりが強く粒子の細かい黒色土を基本とするが、底面から約0.2 m～0.4 mにある埋土中層 (Fig.8・9土層注記2)に、こぶし程度の大きさの黒色粘土ブロックを多量に含むことが大きな特徴である。また、SK05・SK06は埋土の状況だけではなく、長軸をそろえて位置しており、規模もほぼ同じで、平面プランや掘形にも共通性がみられる。以上のことから、これらの土坑の機能は不明であるが、ほぼ同時期に同じ目的で掘削された遺構であるといえるだろう。

SK09 (Fig.11)

SK04の北側に位置する、弥生時代中期の土坑である。検出面の標高は7.4 mをはかる。北東～南西方向に長軸をもつ楕円形のプランをなし、長辺は1 m、短辺は0.85 mで、検出面から深さ0.25 m程度残存する。底面からゆるやかにたちあがる形をなし、他の弥生時代の遺構とは異なり、埋土は黒褐色土を基本とする。

[SK09 出土遺物 (Fig.11)]

弥生土器のみ出土した。器面の剥落がすんでおり、調整等はよくわからないものがほとんどである。1は高杯である。調査は不明だが内外面に丹塗が施される。須玖I式か、2は甕棺の底部である。周囲に甕棺を検出した調査地点は限られることから、本調査地点南側の114次調査区からの流入の可能性が考えられる。

SK12 (Fig.12)

調査区の南半東により位置する。SD03完掘後にその床面において検出した。検出面の標高は6.8 m前後である。1辺0.5 m程度の隅丸方形のプランをなし、検出面からの深さは0.5 mをはかる。底面は平坦面をつくらず、壁面はゆるやかに立ちあがる。平面的に柱痕跡の検出を試みたが確認することはできなかつた。

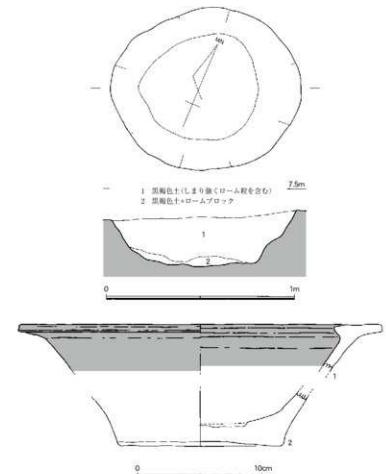
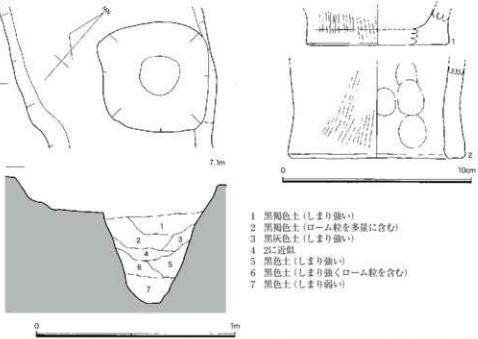


Fig.11 SK09 平面図・断面図 (S = 1/20)・出土遺物実測図 (S = 1/3)

埋土は、ほかの弥生時代の遺構と同様に、ローム粒を含みかたくしまった黒色土～黒褐色土を基本とする。

[SK12 出土遺物]

弥生土器のみ出土した。1は甕の底部である。外面に粗い縦方向のハケ調整が観察できる。2は器台の脚部である。内面に指オサエ、外面に縦方向のハケ調整がわずかにのこる。



- 1 黒褐色土(しまり強い)
- 2 黒褐色土(ローム粒を多量に含む)
- 3 黑褐色土(しまり強)
- 4 灰色土
- 5 黑色土(しまり強)
- 6 黑色土(しまり強くローム粒を含む)
- 7 黑色土(しまり弱)

b. 古代・中世の遺構と遺物

古代の遺構はSK48のみであり、ほかの土坑2基、井戸2基、溝4条はすべて中世の所産である。

① 土坑

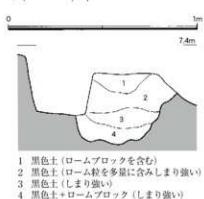
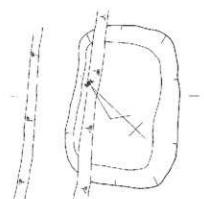
SK10 (Fig.13)

SK04の北側に位置する中世前半の土坑である。標高7.3 mで検出し、北側を擾乱に、南側を別の遺構にきられる。長軸を東西方向とする隅丸長方形のプランをなし、長辺0.85 m、短辺0.55 m、検出面からの深さ0.45 mをはかる。底面はでこぼこしておゆるやかに立ち上がる壁面へとづく。埋土はローム粒を含むしまりの強い黒色土をベースとする。

[SK10 出土遺物 (Fig.13)]

1は同安窯系青磁皿のI類である。胎土は淡灰褐色、釉は褐色色を帯びた淡緑色である。

SK10からはこのほかに図化し得ない弥生土器の小片が出土している。その一方で中世の遺物は1以外出土していない。このため、SK10は弥生時代の遺構の可能性も考えられる。



- 1 黒色土(ロームブロックを含む)
- 2 黒色土(ローム粒を多量に含みしまり強)
- 3 黑色土(しまり強)
- 4 黑色土(ロームブロック(しまり弱))



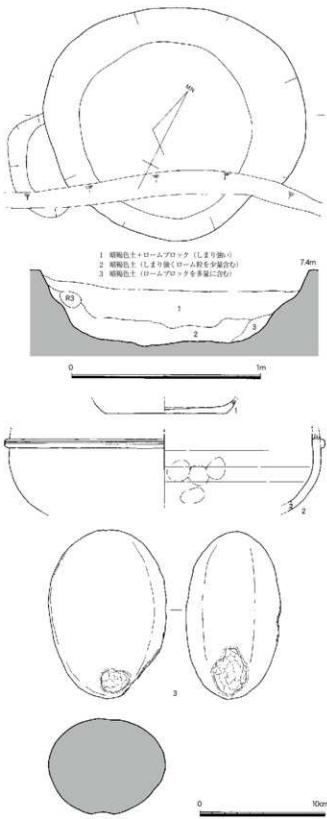


Fig.14 SK13 平面図・断面図 (S = 1/20)
出土遺物実測図 (S = 1/3)

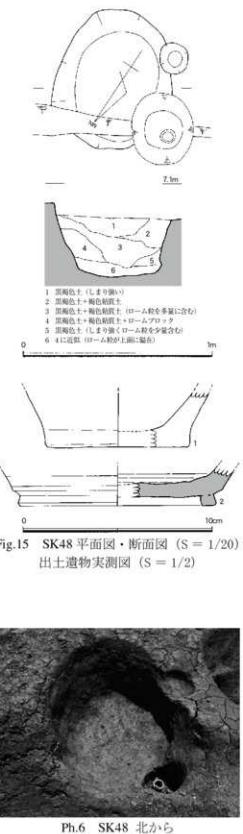


Fig.15 SK48 平面図・断面図 (S = 1/20)
出土遺物実測図 (S = 1/2)

SK13 (Fig.14)

SK09の西側に位置する、中世後半の土坑である。検出面の標高は7.4m前後をはかる、南側の一部を擾乱にきられる。直径1.2m～1.4mの円形のプランをなす。検出面からの深さは0.4m程度である。埋土はこぶし大程度の大きさのロームブロックを多量に含む暗褐色土をベースとする。他の遺構と異なり、埋め戻したような印象をうける。

[SK13 出土遺物 (Fig.14)]

1は土師皿である。定径は9.4cmをはかる。摩滅が著しいため、底部の調整痕を観察することはできない。2は下層から出土した瓦質土器の湯釜である。摩滅がすんでいるが、体部下半に貼りつけられた突帯にはナデの痕跡やおもわれる条線が観察できる。16世紀代のものとおもわれる。3は、第1層と第2層の境界で出土した弥生時代の砂岩製敲石である。下端と上端に敲打痕がありその周辺が剥落している。また、側面は被然している。長さ13.4cm、幅9.4cm、厚さ7.7cm、重量1465.83gを測る。図示した遺物のほかには、土師器・須恵器の小片が出土している。

SK48 (Fig.15・Ph.6)

SK13の南側に位置する、古代の土坑である。検出面の標高は6.95m前後をはかる。北側を擾乱にきられ、西側を別の遺構にきられる。南北方向に長軸をもつ楕円形のプランをなす。長さ0.75m、幅0.6m、検出面からの深さは0.35m程度である。埋土は、ローム粒を含む黒褐色土と褐色粘土質の混合土である。

[SK48 出土遺物 (Fig.15)]

1は弥生土器の甕である。摩滅が顕著で調整痕を観察することはできない。2は須恵器碗である。高台断面形は方形を呈し、底部からのたちあがりは稜をなす。8世紀代の所産である。図示した遺物のほかには、土師器・須恵器の小片が出土している。

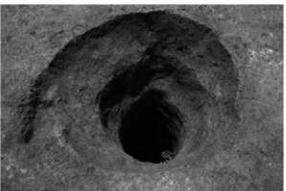
② 井戸

SE08 (Fig.16・Ph.7)

SK09の北側に位置する中世後半の素掘りの井戸である。検出面の標高は7.4m前後をはかる。検出面で確認した平面プランは、直径1.7m～1.8mをはかる不整円形をなし、検出面から3.1m付近(標高約4.3m)で底面に至る。掘削中は標高5.8m付近から湧水が始まった。

底面は、直径約0.5mの平坦な不整円形で、ほぼ垂直にたちあがる壁面へとづく。壁面は、検出面からの深さが1m前後(標高約6.4m)までほぼ垂直にたちあがり、そこから角度を変えてゆるやかに外へ開く。ただし、標高約6.0mから、八女粘土漸移層と八女粘土の境界である標高5.2mまでは、壁面が崩落する。

埋土は上層では拳程度のロームブロックが混



Ph.6 SK48 北から

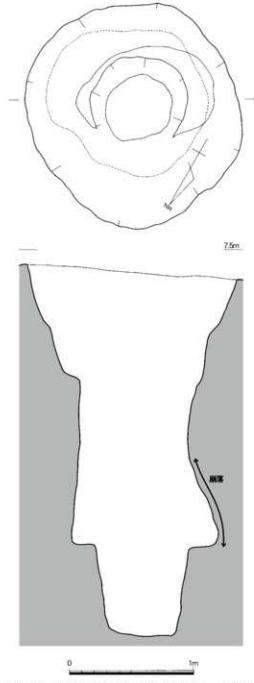


Fig.16 SE08 平面図・断面図 (S = 1/30)

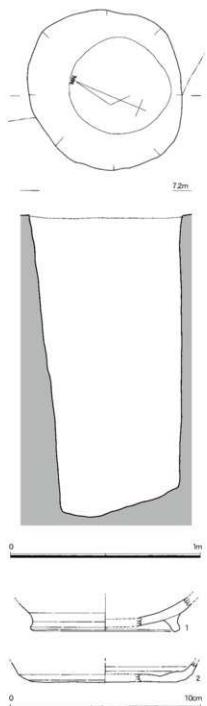


Fig.17 SE55 平面図・断面図 (S = 1/20)
出土遺物実測図 (S = 1/2)

じる暗褐色土で、下層ほど粘性を増し、暗灰色粘質土となる。底面では、八女粘土ブロックが混じる淡褐色シルトとなる。

遺物は、土器器・須恵器・輸入陶器・瓦質土器などのほかに、下層から細かい木片が出土した。いずれも細片であるため図化し得ない。

SE55 (Fig.17)

調査区南西端に位置する素掘りの井戸である。西半は調査区外へとつなづく。当初は、SE08とは異なり、SK48などに埋土が類似することから、土坑と認識して掘削をすすめていたが、掘削深度がある程度すすんだため、調査区を一部拡張して井戸として造営掘削を行った。検出面の標高は7.05m前後をはかる。掘形は直径0.8mをはかる不整円形プランをなし、検出面から1.6m付近（標高約5.6m）で底面に至る。湧水はなかった。

底面は、直径約0.55mの不整円形で、南側から北側にむかって傾斜する。壁面は、南側はほぼ垂直にたちあがり、北側は若干外へひらく。埋土は、しまりの強いローム粒を含む暗褐色土をベースとし、底面付近ではよくまとった黒色土となる。

[SK55 出土遺物 (Fig.17)]

1は内黒の黑色土器である。底部はゆるやかに湾曲し、隅丸方形の高台をもつ。高台径は8.0cmをはかる。磨滅がすすんでおり、調整等は確認できない。2は口縁部を欠損する土器部品である。底径は7.6cmをはかる。淡褐色を呈し、底部はヘア切り調整され、ケズリは施さない。

図示した遺物は、いずれも古代後半～中世初頭のものである。このほかには、弥生土器・須恵器・古代瓦・中世瓦などが出土している。いずれも細片であり、SE55の時期はしづらごめない。

③ 溝

SD01 (Fig.18・Ph.8)

調査区南東隅を横切る溝状遺構である。中世後半に埋没したとおもわれるSD02をきって掘削されており、遺構の大部分は調査区外にある。出土遺物が少ないため、時期をしづらごめなのは難しいが、SD02から16世紀前半の遺物が出土することから、少なくとも16世紀以降の掘削と考えられる。

溝の主軸は磁北より若干東偏する。標高7.35m付近で検出し、検出面における最大幅は約3.2m、長さは最大7.3m。検出面からの深さは1.28mをはかる。断面形は全体で底面が平坦なU字状をなすとおもわれるが、検出面からの深さが0.95m前後（標高約6.4m）のところで、西側壁面に沿ってさらに深さ0.35mほど掘り下げて断面逆V形の溝を設けている。北側では、西側壁面の断面逆V形の溝が南側にむかってさらに0.25m～0.3mほど深くなる。調査区東壁際で検出されたため、規模・形状・性格等はよくわからない。壁面・底面ともに掘削時の工具痕などはとくに観察されない。

埋土は、鉄分が沈着する灰褐色土を主体とし、底面に近くなるほど粘性が増す。とくに、底面付近には水分を含んだ灰色粘土が堆積している。滲水環境にあったと考えられるが恒常的な水の流れはないといおもわれる。

[SD01 出土遺物 (Fig.19)]

土量に比べて出土遺物は少ない。2・4はSD01検出面から出土しており、SD02に帰属する可能性もある。

1はSD01下層 (Fig.18・土層13・13'・14・15) から出土した移動式窓の窓部分である。体部および窓の先端部を欠損している。磨滅がすすんでおり調整等は観察できない。2は白磁碗V類である。口径は16.7cmをはかり、釉調は灰白色を呈する。体部下半から底部にかけては施釉されない。体部

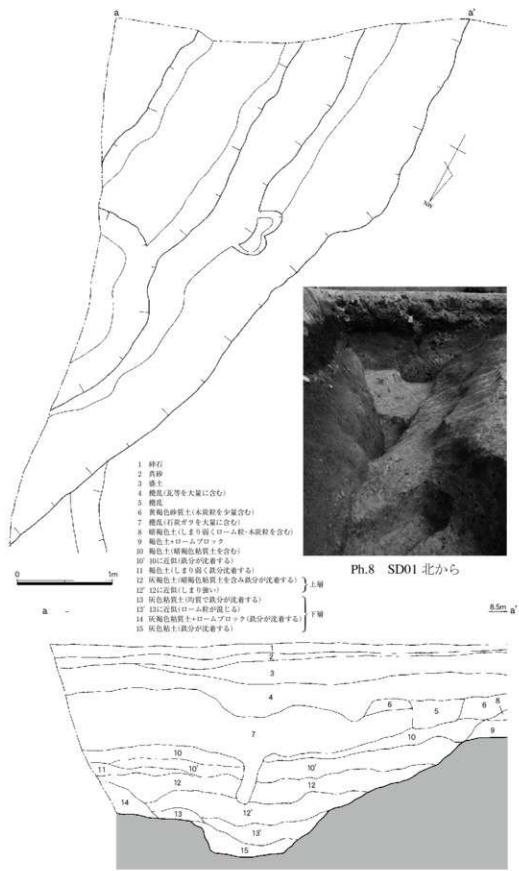
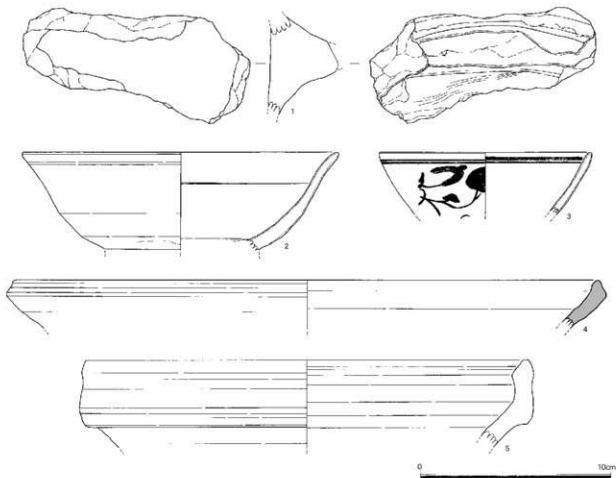


Fig.18 SD01 平面図・断面図 (S = 1/40)

下半にはヘラケズリがほどこされ、内面には沈線がめぐる。11世紀後半～12世紀前半のものである。3はSD01の上層 (Fig.18・土層12-12') から出土した明青花蓮子碗である。口径は11.2cmをはかる。15世紀後半～16世紀後半の所産である。4は須恵質土器こね鉢である。口縁端部はやや肥厚するが下方への拡張は小さい。12世紀前半のもの。5は備前焼すり鉢である。上下に拡張した口縁端部外面に2本の回線をいれる。外面の一部に自然釉がかかる。16世紀代に位置付けられる。

図示したもの以外に、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器などが出土しているが、いずれも細片のため、図化し得ない。



SD02 (Fig.6・20・23・Ph.9・14)

調査区東端の土地境界に沿って検出された、中世後半の溝状遺構である。東肩は調査区外にあり、南北は調査区外へづく。南端をSD01に、北端を搅乱にきられる。現在も、調査区東端には土地境界に沿うように水路が北流しており、SD02はこの現代の水路の前身であると考えられる。南北に長いためFig.6・20・23にかけて図示する。

本調査区では、溝の西肩のみを、南側で約1.2m、北側で約1.8m確認した。検出面の標高は南側で7.0m、北で6.7mをはかり、南から北へ傾斜し、同じように検出面からの深さも南側では0.7m、北側で約0.45mとなる。しかし、底面の標高は6.25m前後で一定で、平坦である。断面形は箱形を

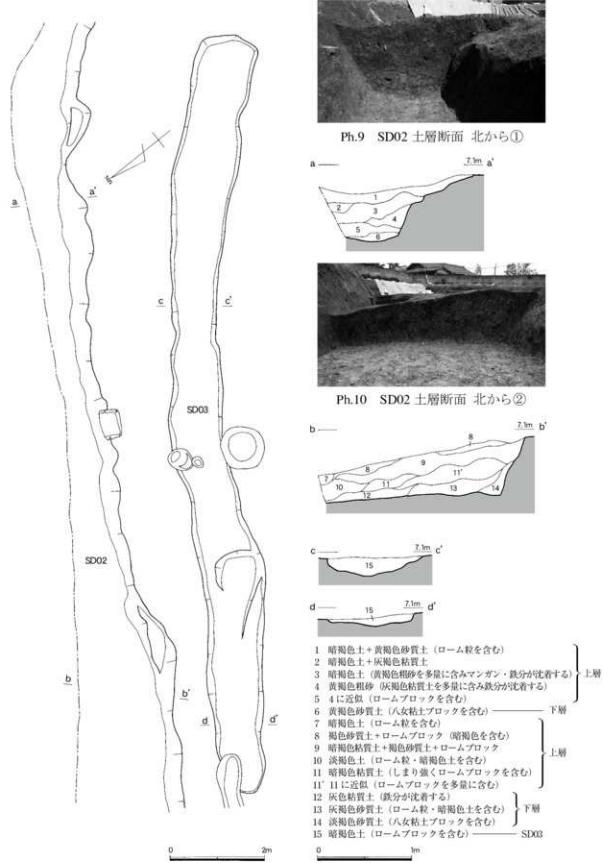


Fig.20 SD02 南半・SD03 平面図 ($S = 1/80$) • 断面図 ($S = 1/40$)

なすとおもわれるが、調査区北端付近では、底面を、さらに0.35mほど掘削してほりくぼめている。調査区東壁際で検出されたため、規模・形状などはよくわからない。また、壁面・底面ともに掘削時の工具痕などはとくに観察されない。

埋土は、暗褐色粘質土を主体とする上層 (Fig.20- 土層1~5, 7~11') と灰黃褐色土~灰色粘土を主体とする下層 (Fig.20- 土層6+12~14) にわけられる。下層には鉄分の沈着が顕著であり、底面付近にはロームブロックと水分を含んだ粘土が堆積している。滲水環境にあったと思われるが、恒常的な水の流れはなかったと考えられる。



Ph.11 SD02 南半 北から Ph.12 SD02 北半 南から

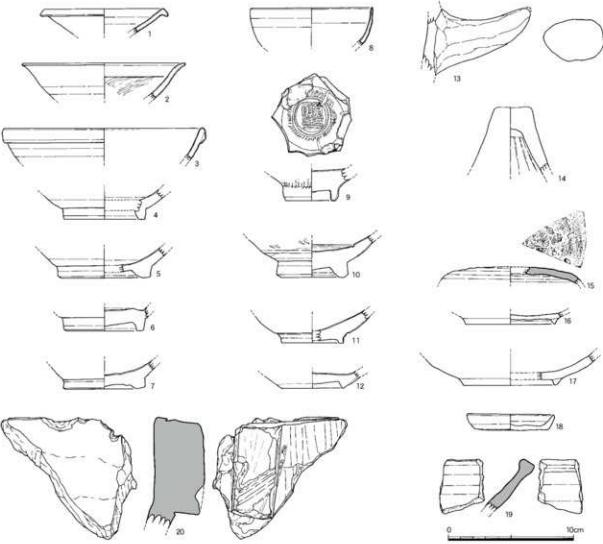


Fig.21 SD02 出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

[SD02 出土遺物 (Fig.21)]

10は下層、10以外はすべて上層から出土した。

1～7・10はすべて白磁である。1は口径 10.2cm をはかる皿IV類で、釉調は灰黄色を呈する。2は碗VI類で、内面の体部上位に沈線がめぐりその下部に櫛目文がほどこされる。3は玉縁口縁を有する碗IV類である。口縁直下からヘラケズリがほどこされる。5は底径 7.4cm をはかる碗II類である。高台外面は直に高台内面は斜めに削る。焼成があまく胎土は淡褐色を呈し、黄白色の釉はくすんでいる。4・6は内面見込みの釉を輪状にかきとる碗Ⅴ類の底部である。4は内面見込みに段はつかない。外面部体部下半はヘラケズリが露胎である。6は釉のかきとり部分が段をなし、目跡も付着する。7は碗IV類である。内面底面にあったとおもわれる段あるいは沈線部分が欠損している。焼成があまく、釉には気泡があり胎土は淡赤橙色を呈する。10はオリーブ黄色の釉がほどこされた白磁碗II類である。体部下半にはヘラケズリが施され、高台は斜めに削られる。内面見込みには段をもうけ、外面上には描文が施されるようである。1～3・5・7・10は11世紀後半～12世紀前半、4・6は12世紀中頃～12世紀後半の所産である。

8・9・11・12はすべて、青磁である。8は口径 10cm をはかる小碗で、胎土は淡青灰色、釉は暗緑乳色を呈する。9は上層から出土し、内面見込みに「顧氏」銘をもつ碗である。緑灰色の釉を全面にほどこし、施釉後に外底の釉を輪状にかきとる。15世紀後半～16世紀代の所産である。11は底径 5cm をはかる小碗底部である。畳付の釉をかきとっている。8と釉調が似るが、胎土は黒色粒・白色粒が多く含み粗い。12は基底筒の皿である。底径は 4.8cm をはかる。胎土は淡橙色、釉は黄味をおびた緑灰色を呈する。8・11・12は16世紀代のものとおもわれる。

13は瓶の把手、14は古式土器師の高杯あるいは鉢の脚部である。15は須恵器壺蓋で、外面天井部にヘラ記号をのこす。16・17は12世紀～13世紀代とおもわれる瓦器碗底部である。摩減がすんでおり調整痕は観察できない。18は口径 7cm、器高 1.3cm をはかる土器小皿である。底部は糸切り調整される。19は須恵器土器こね鉢である。口縁部端部が上下にやや拡張する。20は、縦方向に耳がいくつも滑石製石縫である。用途は不明であるが転用されており、破面に研磨痕跡が観察される。11世紀前半か。

このほかに弥生土器・古代瓦など出土しているがいずれも細片のため図化し得ない。

SD03 (Fig.20)

調査区南半東よりに位置する溝状遺構である。主軸は北東～南西方向をとり、SD02 の西側に沿うように掘削されている。標高 7.0m ～ 7.05m 付近で検出し、幅 0.9m ～ 1.32m、長さ約 16m をはかる。検出面から深さ 0.1m ～ 0.2m 残存するのみである。断面形は浅いU字形をなし、底面には凹凸がある。

埋土はロームブロックを含む暗褐色土である。

出土遺物には図示したもの以外には鉄釘が出土するのみであり、時期の詳細は不明である。しかし、SD03 と SD02 の溝のカーブが一致することなどから、SD03 は SD02 と同時に掘削されたものである可能性が高い。

[SD03 出土遺物 (Fig.22)]

1～4すべてが弥生時代中期のものである。1・2は広口壺である。1・2ともに、口縁端部内外面に粘土を貼り付けることによって上端部を平坦化している。摩減がすんでおり調整等は観察できない。3は口縁部上端および外面を丹塗磨研された甌である。口縁端部にヘラ状工具によって施された浅い刻目をもつ。4は甌の底部である。外面に粗い縦方向のハケ調整を観察できる。

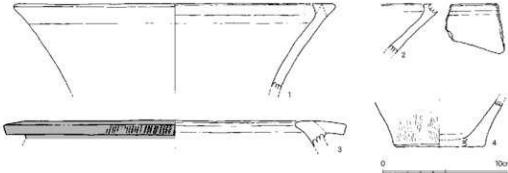


Fig.22 SD03 出土遺物実図 (S = 1/3)

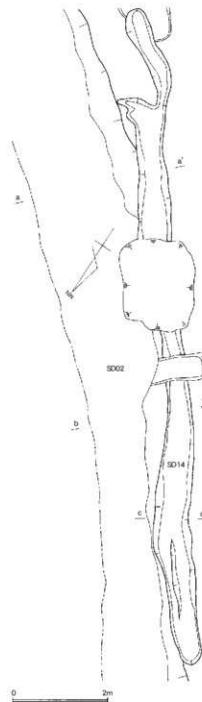
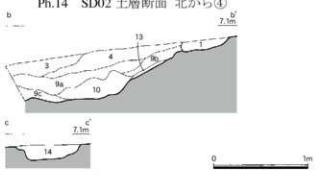
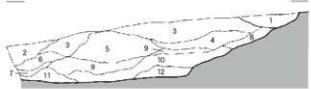


Fig.23 SD02 北・SD14 平面図 (S = 1/80)・断面図 (S = 1/40)



Ph.13 SD02 土層断面 北から③



1 亂れ釉陶片 - SD44
2 頭付片
3 緑褐色釉片 - 舌状砂利とロームブロック
4 緑褐色釉片 - ロームブロック(頭部を含む)
5 緑褐色釉片 - ロームブロック(頭部を含む)
6 緑褐色釉片 - ロームブロック(頭部を含む)
7 緑褐色釉片 - ロームブロック(頭部を含む)
8 緑褐色釉片 - ロームブロック
9 暗色粘土(頭部を含む)
10 暗色粘土(頭部を含む)
11 暗色粘土(頭部を含む)
12 暗色粘土
13 暗色粘土 - A層を含む
14 暗色粘土(ロームブロックを含む部分が発達する)
15 暗色粘土(頭部を含む)
16 暗色粘土(ロームブロックを含む)
17 暗色粘土(頭部を含む)
18 暗色粘土(ロームブロックを含む)
19 暗色粘土(頭部を含む)
20 暗色粘土(ロームブロックを含む)
21 暗色粘土(頭部を含む)
22 暗色粘土(頭部を含む)
23 暗色粘土(頭部を含む)
24 暗色粘土(頭部を含む)
25 暗色粘土(頭部を含む)
26 暗色粘土(頭部を含む)
27 暗色粘土(頭部を含む)
28 暗色粘土(頭部を含む)
29 暗色粘土(頭部を含む)
30 暗色粘土(頭部を含む)
31 暗色粘土(頭部を含む)
32 暗色粘土(頭部を含む)
33 暗色粘土(頭部を含む)
34 暗色粘土(頭部を含む)
35 暗色粘土(頭部を含む)
36 暗色粘土(頭部を含む)
37 暗色粘土(頭部を含む)
38 暗色粘土(頭部を含む)
39 暗色粘土(頭部を含む)
40 暗色粘土(頭部を含む)
41 暗色粘土(頭部を含む)
42 暗色粘土
43 暗色粘土 - A層を含む
44 暗色粘土(頭部を含む)
45 暗色粘土(頭部を含む)
46 暗色粘土(頭部を含む)
47 暗色粘土(頭部を含む)
48 暗色粘土(頭部を含む)
49 暗色粘土(頭部を含む)
50 暗色粘土(頭部を含む)
51 暗色粘土(頭部を含む)
52 暗色粘土(頭部を含む)
53 暗色粘土(頭部を含む)
54 暗色粘土(頭部を含む)
55 暗色粘土(頭部を含む)
56 暗色粘土(頭部を含む)
57 暗色粘土(頭部を含む)
58 暗色粘土(頭部を含む)
59 暗色粘土(頭部を含む)
60 暗色粘土(頭部を含む)
61 暗色粘土(頭部を含む)
62 暗色粘土(頭部を含む)
63 暗色粘土(頭部を含む)
64 暗色粘土(頭部を含む)
65 暗色粘土(頭部を含む)
66 暗色粘土(頭部を含む)
67 暗色粘土(頭部を含む)
68 暗色粘土(頭部を含む)
69 暗色粘土(頭部を含む)
70 暗色粘土(頭部を含む)
71 暗色粘土(頭部を含む)
72 暗色粘土(頭部を含む)
73 暗色粘土(頭部を含む)
74 暗色粘土(頭部を含む)
75 暗色粘土(頭部を含む)
76 暗色粘土(頭部を含む)
77 暗色粘土(頭部を含む)
78 暗色粘土(頭部を含む)
79 暗色粘土(頭部を含む)
80 暗色粘土(頭部を含む)
81 暗色粘土(頭部を含む)
82 暗色粘土(頭部を含む)
83 暗色粘土(頭部を含む)
84 暗色粘土(頭部を含む)
85 暗色粘土(頭部を含む)
86 暗色粘土(頭部を含む)
87 暗色粘土(頭部を含む)
88 暗色粘土(頭部を含む)
89 暗色粘土(頭部を含む)
90 暗色粘土(頭部を含む)
91 暗色粘土(頭部を含む)
92 暗色粘土(頭部を含む)
93 暗色粘土(頭部を含む)
94 暗色粘土(頭部を含む)
95 暗色粘土(頭部を含む)
96 暗色粘土(頭部を含む)
97 暗色粘土(頭部を含む)
98 暗色粘土(頭部を含む)
99 暗色粘土(頭部を含む)
100 暗色粘土(頭部を含む)
101 暗色粘土(頭部を含む)
102 暗色粘土(頭部を含む)
103 暗色粘土(頭部を含む)
104 暗色粘土(頭部を含む)
105 暗色粘土(頭部を含む)
106 暗色粘土(頭部を含む)
107 暗色粘土(頭部を含む)
108 暗色粘土(頭部を含む)
109 暗色粘土(頭部を含む)
110 暗色粘土(頭部を含む)
111 暗色粘土(頭部を含む)
112 暗色粘土(頭部を含む)
113 暗色粘土(頭部を含む)
114 暗色粘土(頭部を含む)
115 暗色粘土(頭部を含む)
116 暗色粘土(頭部を含む)
117 暗色粘土(頭部を含む)
118 暗色粘土(頭部を含む)
119 暗色粘土(頭部を含む)
120 暗色粘土(頭部を含む)
121 暗色粘土(頭部を含む)
122 暗色粘土(頭部を含む)
123 暗色粘土(頭部を含む)
124 暗色粘土(頭部を含む)
125 暗色粘土(頭部を含む)
126 暗色粘土(頭部を含む)
127 暗色粘土(頭部を含む)
128 暗色粘土(頭部を含む)
129 暗色粘土(頭部を含む)
130 暗色粘土(頭部を含む)
131 暗色粘土(頭部を含む)
132 暗色粘土(頭部を含む)
133 暗色粘土(頭部を含む)
134 暗色粘土(頭部を含む)
135 暗色粘土(頭部を含む)
136 暗色粘土(頭部を含む)
137 暗色粘土(頭部を含む)
138 暗色粘土(頭部を含む)
139 暗色粘土(頭部を含む)
140 暗色粘土(頭部を含む)
141 暗色粘土(頭部を含む)
142 暗色粘土(頭部を含む)
143 暗色粘土(頭部を含む)
144 暗色粘土(頭部を含む)
145 暗色粘土(頭部を含む)
146 暗色粘土(頭部を含む)
147 暗色粘土(頭部を含む)
148 暗色粘土(頭部を含む)
149 暗色粘土(頭部を含む)
150 暗色粘土(頭部を含む)
151 暗色粘土(頭部を含む)
152 暗色粘土(頭部を含む)
153 暗色粘土(頭部を含む)
154 暗色粘土(頭部を含む)
155 暗色粘土(頭部を含む)
156 暗色粘土(頭部を含む)
157 暗色粘土(頭部を含む)
158 暗色粘土(頭部を含む)
159 暗色粘土(頭部を含む)
160 暗色粘土(頭部を含む)
161 暗色粘土(頭部を含む)
162 暗色粘土(頭部を含む)
163 暗色粘土(頭部を含む)
164 暗色粘土(頭部を含む)
165 暗色粘土(頭部を含む)
166 暗色粘土(頭部を含む)
167 暗色粘土(頭部を含む)
168 暗色粘土(頭部を含む)
169 暗色粘土(頭部を含む)
170 暗色粘土(頭部を含む)
171 暗色粘土(頭部を含む)
172 暗色粘土(頭部を含む)
173 暗色粘土(頭部を含む)
174 暗色粘土(頭部を含む)
175 暗色粘土(頭部を含む)
176 暗色粘土(頭部を含む)
177 暗色粘土(頭部を含む)
178 暗色粘土(頭部を含む)
179 暗色粘土(頭部を含む)
180 暗色粘土(頭部を含む)
181 暗色粘土(頭部を含む)
182 暗色粘土(頭部を含む)
183 暗色粘土(頭部を含む)
184 暗色粘土(頭部を含む)
185 暗色粘土(頭部を含む)
186 暗色粘土(頭部を含む)
187 暗色粘土(頭部を含む)
188 暗色粘土(頭部を含む)
189 暗色粘土(頭部を含む)
190 暗色粘土(頭部を含む)
191 暗色粘土(頭部を含む)
192 暗色粘土(頭部を含む)
193 暗色粘土(頭部を含む)
194 暗色粘土(頭部を含む)
195 暗色粘土(頭部を含む)
196 暗色粘土(頭部を含む)
197 暗色粘土(頭部を含む)
198 暗色粘土(頭部を含む)
199 暗色粘土(頭部を含む)
200 暗色粘土(頭部を含む)
201 暗色粘土(頭部を含む)
202 暗色粘土(頭部を含む)
203 暗色粘土(頭部を含む)
204 暗色粘土(頭部を含む)
205 暗色粘土(頭部を含む)
206 暗色粘土(頭部を含む)
207 暗色粘土(頭部を含む)
208 暗色粘土(頭部を含む)
209 暗色粘土(頭部を含む)
210 暗色粘土(頭部を含む)
211 暗色粘土(頭部を含む)
212 暗色粘土(頭部を含む)
213 暗色粘土(頭部を含む)
214 暗色粘土(頭部を含む)
215 暗色粘土(頭部を含む)
216 暗色粘土(頭部を含む)
217 暗色粘土(頭部を含む)
218 暗色粘土(頭部を含む)
219 暗色粘土(頭部を含む)
220 暗色粘土(頭部を含む)
221 暗色粘土(頭部を含む)
222 暗色粘土(頭部を含む)
223 暗色粘土(頭部を含む)
224 暗色粘土(頭部を含む)
225 暗色粘土(頭部を含む)
226 暗色粘土(頭部を含む)
227 暗色粘土(頭部を含む)
228 暗色粘土(頭部を含む)
229 暗色粘土(頭部を含む)
230 暗色粘土(頭部を含む)
231 暗色粘土(頭部を含む)
232 暗色粘土(頭部を含む)
233 暗色粘土(頭部を含む)
234 暗色粘土(頭部を含む)
235 暗色粘土(頭部を含む)
236 暗色粘土(頭部を含む)
237 暗色粘土(頭部を含む)
238 暗色粘土(頭部を含む)
239 暗色粘土(頭部を含む)
240 暗色粘土(頭部を含む)
241 暗色粘土(頭部を含む)
242 暗色粘土(頭部を含む)
243 暗色粘土(頭部を含む)
244 暗色粘土(頭部を含む)
245 暗色粘土(頭部を含む)
246 暗色粘土(頭部を含む)
247 暗色粘土(頭部を含む)
248 暗色粘土(頭部を含む)
249 暗色粘土(頭部を含む)
250 暗色粘土(頭部を含む)
251 暗色粘土(頭部を含む)
252 暗色粘土(頭部を含む)
253 暗色粘土(頭部を含む)
254 暗色粘土(頭部を含む)
255 暗色粘土(頭部を含む)
256 暗色粘土(頭部を含む)
257 暗色粘土(頭部を含む)
258 暗色粘土(頭部を含む)
259 暗色粘土(頭部を含む)
260 暗色粘土(頭部を含む)
261 暗色粘土(頭部を含む)
262 暗色粘土(頭部を含む)
263 暗色粘土(頭部を含む)
264 暗色粘土(頭部を含む)
265 暗色粘土(頭部を含む)
266 暗色粘土(頭部を含む)
267 暗色粘土(頭部を含む)
268 暗色粘土(頭部を含む)
269 暗色粘土(頭部を含む)
270 暗色粘土(頭部を含む)
271 暗色粘土(頭部を含む)
272 暗色粘土(頭部を含む)
273 暗色粘土(頭部を含む)
274 暗色粘土(頭部を含む)
275 暗色粘土(頭部を含む)
276 暗色粘土(頭部を含む)
277 暗色粘土(頭部を含む)
278 暗色粘土(頭部を含む)
279 暗色粘土(頭部を含む)
280 暗色粘土(頭部を含む)
281 暗色粘土(頭部を含む)
282 暗色粘土(頭部を含む)
283 暗色粘土(頭部を含む)
284 暗色粘土(頭部を含む)
285 暗色粘土(頭部を含む)
286 暗色粘土(頭部を含む)
287 暗色粘土(頭部を含む)
288 暗色粘土(頭部を含む)
289 暗色粘土(頭部を含む)
290 暗色粘土(頭部を含む)
291 暗色粘土(頭部を含む)
292 暗色粘土(頭部を含む)
293 暗色粘土(頭部を含む)
294 暗色粘土(頭部を含む)
295 暗色粘土(頭部を含む)
296 暗色粘土(頭部を含む)
297 暗色粘土(頭部を含む)
298 暗色粘土(頭部を含む)
299 暗色粘土(頭部を含む)
300 暗色粘土(頭部を含む)
301 暗色粘土(頭部を含む)
302 暗色粘土(頭部を含む)
303 暗色粘土(頭部を含む)
304 暗色粘土(頭部を含む)
305 暗色粘土(頭部を含む)
306 暗色粘土(頭部を含む)
307 暗色粘土(頭部を含む)
308 暗色粘土(頭部を含む)
309 暗色粘土(頭部を含む)
310 暗色粘土(頭部を含む)
311 暗色粘土(頭部を含む)
312 暗色粘土(頭部を含む)
313 暗色粘土(頭部を含む)
314 暗色粘土(頭部を含む)
315 暗色粘土(頭部を含む)
316 暗色粘土(頭部を含む)
317 暗色粘土(頭部を含む)
318 暗色粘土(頭部を含む)
319 暗色粘土(頭部を含む)
320 暗色粘土(頭部を含む)
321 暗色粘土(頭部を含む)
322 暗色粘土(頭部を含む)
323 暗色粘土(頭部を含む)
324 暗色粘土(頭部を含む)
325 暗色粘土(頭部を含む)
326 暗色粘土(頭部を含む)
327 暗色粘土(頭部を含む)
328 暗色粘土(頭部を含む)
329 暗色粘土(頭部を含む)
330 暗色粘土(頭部を含む)
331 暗色粘土(頭部を含む)
332 暗色粘土(頭部を含む)
333 暗色粘土(頭部を含む)
334 暗色粘土(頭部を含む)
335 暗色粘土(頭部を含む)
336 暗色粘土(頭部を含む)
337 暗色粘土(頭部を含む)
338 暗色粘土(頭部を含む)
339 暗色粘土(頭部を含む)
340 暗色粘土(頭部を含む)
341 暗色粘土(頭部を含む)
342 暗色粘土(頭部を含む)
343 暗色粘土(頭部を含む)
344 暗色粘土(頭部を含む)
345 暗色粘土(頭部を含む)
346 暗色粘土(頭部を含む)
347 暗色粘土(頭部を含む)
348 暗色粘土(頭部を含む)
349 暗色粘土(頭部を含む)
350 暗色粘土(頭部を含む)
351 暗色粘土(頭部を含む)
352 暗色粘土(頭部を含む)
353 暗色粘土(頭部を含む)
354 暗色粘土(頭部を含む)
355 暗色粘土(頭部を含む)
356 暗色粘土(頭部を含む)
357 暗色粘土(頭部を含む)
358 暗色粘土(頭部を含む)
359 暗色粘土(頭部を含む)
360 暗色粘土(頭部を含む)
361 暗色粘土(頭部を含む)
362 暗色粘土(頭部を含む)
363 暗色粘土(頭部を含む)
364 暗色粘土(頭部を含む)
365 暗色粘土(頭部を含む)
366 暗色粘土(頭部を含む)
367 暗色粘土(頭部を含む)
368 暗色粘土(頭部を含む)
369 暗色粘土(頭部を含む)
370 暗色粘土(頭部を含む)
371 暗色粘土(頭部を含む)
372 暗色粘土(頭部を含む)
373 暗色粘土(頭部を含む)
374 暗色粘土(頭部を含む)
375 暗色粘土(頭部を含む)
376 暗色粘土(頭部を含む)
377 暗色粘土(頭部を含む)
378 暗色粘土(頭部を含む)
379 暗色粘土(頭部を含む)
380 暗色粘土(頭部を含む)
381 暗色粘土(頭部を含む)
382 暗色粘土(頭部を含む)
383 暗色粘土(頭部を含む)
384 暗色粘土(頭部を含む)
385 暗色粘土(頭部を含む)
386 暗色粘土(頭部を含む)
387 暗色粘土(頭部を含む)
388 暗色粘土(頭部を含む)
389 暗色粘土(頭部を含む)
390 暗色粘土(頭部を含む)
391 暗色粘土(頭部を含む)
392 暗色粘土(頭部を含む)
393 暗色粘土(頭部を含む)
394 暗色粘土(頭部を含む)
395 暗色粘土(頭部を含む)
396 暗色粘土(頭部を含む)
397 暗色粘土(頭部を含む)
398 暗色粘土(頭部を含む)
399 暗色粘土(頭部を含む)
400 暗色粘土(頭部を含む)
401 暗色粘土(頭部を含む)
402 暗色粘土(頭部を含む)
403 暗色粘土(頭部を含む)
404 暗色粘土(頭部を含む)
405 暗色粘土(頭部を含む)
406 暗色粘土(頭部を含む)
407 暗色粘土(頭部を含む)
408 暗色粘土(頭部を含む)
409 暗色粘土(頭部を含む)
410 暗色粘土(頭部を含む)
411 暗色粘土(頭部を含む)
412 暗色粘土(頭部を含む)
413 暗色粘土(頭部を含む)
414 暗色粘土(頭部を含む)
415 暗色粘土(頭部を含む)
416 暗色粘土(頭部を含む)
417 暗色粘土(頭部を含む)
418 暗色粘土(頭部を含む)
419 暗色粘土(頭部を含む)
420 暗色粘土(頭部を含む)
421 暗色粘土(頭部を含む)
422 暗色粘土(頭部を含む)
423 暗色粘土(頭部を含む)
424 暗色粘土(頭部を含む)
425 暗色粘土(頭部を含む)
426 暗色粘土(頭部を含む)
427 暗色粘土(頭部を含む)
428 暗色粘土(頭部を含む)
429 暗色粘土(頭部を含む)
430 暗色粘土(頭部を含む)
431 暗色粘土(頭部を含む)
432 暗色粘土(頭部を含む)
433 暗色粘土(頭部を含む)
434 暗色粘土(頭部を含む)
435 暗色粘土(頭部を含む)
436 暗色粘土(頭部を含む)
437 暗色粘土(頭部を含む)
438 暗色粘土(頭部を含む)
439 暗色粘土(頭部を含む)
440 暗色粘土(頭部を含む)
441 暗色粘土(頭部を含む)
442 暗色粘土(頭部を含む)
443 暗色粘土(頭部を含む)
444 暗色粘土(頭部を含む)
445 暗色粘土(頭部を含む)
446 暗色粘土(頭部を含む)
447 暗色粘土(頭部を含む)
448 暗色粘土(頭部を含む)
449 暗色粘土(頭部を含む)
450 暗色粘土(頭部を含む)
451 暗色粘土(頭部を含む)
452 暗色粘土(頭部を含む)
453 暗色粘土(頭部を含む)
454 暗色粘土(頭部を含む)
455 暗色粘土(頭部を含む)
456 暗色粘土(頭部を含む)
457 暗色粘土(頭部を含む)
458 暗色粘土(頭部を含む)
459 暗色粘土(頭部を含む)
460 暗色粘土(頭部を含む)
461 暗色粘土(頭部を含む)
462 暗色粘土(頭部を含む)
463 暗色粘土(頭部を含む)
464 暗色粘土(頭部を含む)
465 暗色粘土(頭部を含む)
466 暗色粘土(頭部を含む)
467 暗色粘土(頭部を含む)
468 暗色粘土(頭部を含む)
469 暗色粘土(頭部を含む)
470 暗色粘土(頭部を含む)
471 暗色粘土(頭部を含む)
472 暗色粘土(頭部を含む)
473 暗色粘土(頭部を含む)
474 暗色粘土(頭部を含む)
475 暗色粘土(頭部を含む)
476 暗色粘土(頭部を含む)
477 暗色粘土(頭部を含む)
478 暗色粘土(頭部を含む)
479 暗色粘土(頭部を含む)
480 暗色粘土(頭部を含む)
481 暗色粘土(頭部を含む)
482 暗色粘土(頭部を含む)
483 暗色粘土(頭部を含む)
484 暗色粘土(頭部を含む)
485 暗色粘土(頭部を含む)
486 暗色粘土(頭部を含む)
487 暗色粘土(頭部を含む)
488 暗色粘土(頭部を含む)
489 暗色粘土(頭部を含む)
490 暗色粘土(頭部を含む)
491 暗色粘土(頭部を含む)
492 暗色粘土(頭部を含む)
493 暗色粘土(頭部を含む)
494 暗色粘土(頭部を含む)
495 暗色粘土(頭部を含む)
496 暗色粘土(頭部を含む)
497 暗色粘土(頭部を含む)
498 暗色粘土(頭部を含む)
499 暗色粘土(頭部を含む)
500 暗色粘土(頭部を含む)
501 暗色粘土(頭部を含む)
502 暗色粘土(頭部を含む)
503 暗色粘土(頭部を含む)
504 暗色粘土(頭部を含む)
505 暗色粘土(頭部を含む)
506 暗色粘土(頭部を含む)
507 暗色粘土(頭部を含む)
508 暗色粘土(頭部を含む)
509 暗色粘土(頭部を含む)
510 暗色粘土(頭部を含む)
511 暗色粘土(頭部を含む)
512 暗色粘土(頭部を含む)
513 暗色粘土(頭部を含む)
514 暗色粘土(頭部を含む)
515 暗色粘土(頭部を含む)
516 暗色粘土(頭部を含む)
517 暗色粘土(頭部を含む)
518 暗色粘土(頭部を含む)
519 暗色粘土(頭部を含む)
520 暗色粘土(頭部を含む)
521 暗色粘土(頭部を含む)
522 暗色粘土(頭部を含む)
523 暗色粘土(頭部を含む)
524 暗色粘土(頭部を含む)
525 暗色粘土(頭部を含む)
526 暗色粘土(頭部を含む)
527 暗色粘土(頭部を含む)
528 暗色粘土(頭部を含む)
529 暗色粘土(頭部を含む)
530 暗色粘土(頭部を含む)
531 暗色粘土(頭部を含む)
532 暗色粘土(頭部を含む)
533 暗色粘土(頭部を含む)
534 暗色粘土(頭部を含む)
535 暗色粘土(頭部を含む)
536 暗色粘土(頭部を含む)
537 暗色粘土(頭部を含む)
538 暗色粘土(頭部を含む)
539 暗色粘土(頭部を含む)
540 暗色粘土(頭部を含む)
541 暗色粘土(頭部を含む)
542 暗色粘土(頭部を含む)
543 暗色粘土(頭部を含む)
544 暗色粘土(頭部を含む)
545 暗色粘土(頭部を含む)
546 暗色粘土(頭部を含む)
547 暗色粘土(頭部を含む)
548 暗色粘土(頭部を含む)
549 暗色粘土(頭部を含む)
550 暗色粘土(頭部を含む)
551 暗色粘土(頭部を含む)
5

SD14 (Fig. 23)

調査区南半東よりに位置する中世末のものとおもわれる構状遺構である。主軸は北東—南西方向をとり、中世後半のSD03の北端とSD02の西肩を一部きって、掘削されている。標高 6.95 m ~ 7 m 付近で検出し、幅 0.55 m ~ 0.8 m、長さ約 14 m をかる。検出面から深さ 0.15 m 程度残存するのみである。断面形は浅いU字形をなし、一部底面が平坦になるところもある。埋土はローム粒を含む灰黄褐色質土で、鉄分が沈着する部分もある。

[SD14 出土遺物 (Fig. 24)]

1 は 11 世紀後半～12 世紀前半の白磁碗IV類である。底径は 7.0cm をかる。内面には青味かかった灰白色の釉が施され、底部付近に沈線がめぐる。体部下半から高台外面にはとび鉢によるケズリの痕跡が観察できる。2 は福建省漳州窯産の染付皿である。底径は 6.4cm をかる。疊付には砂敷きで焼成された痕跡がのこる。16 世紀末の所産である。

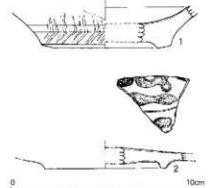


Fig.24 SD14 出土遺物実測図 (S=1/2)

c. そのほかの遺物

1 は SP19 から出土した弥生土器蓋である。天井部の径は 4.4cm をかる。摩滅がすんでおり、内面上部に縦方向の工具ナデの痕跡がある以外は、調整痕を観察することができない。土師器片とともに出土した。2・3 は、中世の柱穴 SP53 から出土した弥生土器蓋底部である。2 の底径は 7.4cm、3 の底径は 9.8cm をかる。ともに器面の剥落がいちじるしい。4 は須恵器の鉢である。底径は 17.2cm に復元できる。SP24 から出土した。古代前半のものとおもわれる。5 は擾乱から出土した、備前焼鉢である。底径は 13.9cm をかる。器表は赤灰色を呈し、胎土には白色砂粒が多く含まれる。描目は直線的に密にもうけられ、摩耗がはげしい。6 は擾乱から出土した土鍋である。口径は 32.2cm をかる。内面には横方向、外面には縦方向のハケ調整で仕上げられている。外面上にはススが付着する。7 は SP33 から出土した明青花碗である。小片のため形態を推測することはできないが、内面は無文である。ほかにともなう遺物はない。8 は土師器壊である。底部から直線的にたちがあり、外反する器形である。口径は 11.8cm、器高は 1.7cm をかる。摩滅がすんでおり、底部の調整を観察することはできない。土師器片が出土した SP29 から出土した。9 は SP46 から須恵器片とともに出土した瓦器碗である。体部下半外面には粘土接合痕が観察できる。10 は擾乱から出土した移動式竈の底部分である。内面は粗い縦方向のハケ調整で仕上げられる。

11 は調査区北半の遺構検出時に出土した、黒曜石剥片である。石材は、黒色部分と灰褐色部分が墨流し状に混じり合うもので、腰岳産ではない可能性が高く、風化がすんでいる。この剥片がまだ石核から剥ぎ出される以前は左斜め下方に向て打面としていたが、計画的に剥片を得ようとする過程のなかで打面転換が行われ、剥出された打面調整剥片であると思われる。右上部には表皮が残存している。剥片に使用した痕跡もなく、二次的な加工痕跡もない。繩文時代前半期の所産と考えられる。重量は 12.85g をかる。

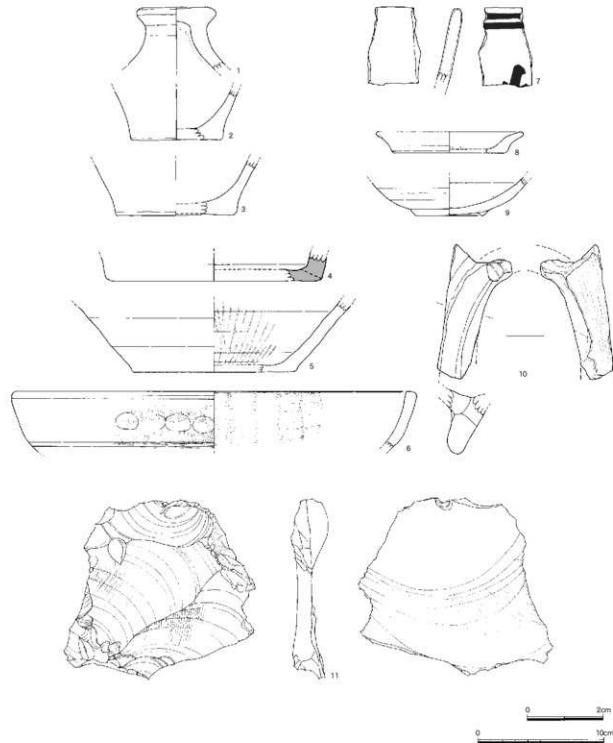


Fig.25 その他の出土遺物実測図 (S=1/1・1/3)

7・11のみ

第4章まとめ

本調査区の遺構面の標高は、南端で7.2 m、北端で6.7 mをはかり、調査区内において南から北へゆるやかに傾斜する。道路を隔てた南隣接地の114次調査5区の遺構面が約8.3 m、東側の83次調査の遺構面が約9.1 m、西側の68次調査の遺構面が標高約8.0 m北側の19次調査遺構面が約7.2 mであることから、本調査地点は周囲よりも、比高差約1 mをもって急激に低くなり、北側につづくことがわかる。周辺調査区で検出された弥生時代の遺構の残存状況を本調査区におけるそれと比較すると、本調査区だけが著しい削平をうけたわけではないと考えられるので、少なくとも弥生時代にはすでに、本調査地点から19次調査地点にかけては、台地の起伏の谷のなかにあり、周囲よりもある程度低い窪地状を呈していたことが推測される。このように考えると、本調査区では周囲の調査区と比較するとともと遺構密度が低かったと考えられる。

このような地形にある本調査地点では、弥生時代の土坑と中世の遺構が少數検出され、標高の高い南側に集中する。このなかでも、弥生時代中期後半のSK04、中世後半の大溝SD02をとりあげて、127次調査のまとめとしたい。

① SK04

SK04は周囲にセットになる柱穴がないことから、立柱遺構として報告するものである。南側に隣接する114次調査1区では、甕棺墓群が北側に展開することが判明しており、ほぼ同規模のスロープがつく立柱遺構SX1049が検出されている。本調査地点において甕棺墓が検出されることはないが、同時期の遺構であるSK05・SK06・SK09などからは、114次調査からの流れ込みと考えられる丹塗磨研の精製土器や甕棺底部が出土している。本調査区周辺で検出された弥生時代中期後半の遺構群としては114次調査1区甕棺墓が最も近いことから、SK04は114次調査地点に展開する中期後半の甕棺墓になんらかの関係がある可能性が考えられる。

② SD02 (Fig. 26・Tab. 1)

SD02は、中世後半に掘削された大溝で、本調査地点の東端にそって検出され、19次調査地点の溝2に連続する。土層の堆積状況から恒常的な水の流れを考えにくく、排水の機能をもった溝状遺構であったと考えられる。出土遺物から16世紀末には埋没したとみられるが、SD02が北流する調査地点東端の土地境界には戦前から機能している水路が現在も使用されており、SD02がつながる19次調査溝2付近まで続いている (Fig. 26)。これらのことから、周囲よりも低い窪地状の地形に掘削された、SD02 (127次調査)・溝2 (19次調査) は、中世後半から現代まで、掘り直しを繰りかえしながら継続的に排水路として使用してきたと考えられる。

SD02のように、中世後半に掘削され16世紀代に埋没する大溝は、現在までに那珂遺跡群の各所において検出されており、台地を縱横にはじめていたことがわかってきてている (Fig. 26)。また、那珂遺跡群の南方に位置する五十川遺跡においても同様の大溝が複数地点で検出されている。文献史料には、文亀元年 (1501年) 9月13日に大内義興が那珂村30町などを家臣深野興信に安堵した記事や『大内氏実錄士代』、天文22年 (1553年) 4月13日に大内氏家臣弘中氏の本領行地板付村が小原因幡守によって押領されたので、その替地として五十講村25町・下長尾村30町が大内氏から弘中氏へあてがわれた記事が記されている (『西郷文書』)。このように、中世後半に那珂遺跡群周辺は大友氏・大内氏家臣團の知行地となっていたようであり、これと大溝を開闢づけて、大溝は知行された家臣たち



報告書抄録

ふりがな	なかごじゅうはち								
書名	那珂 58								
副書名									
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第 1121 集								
編著者名	松尾奈緒子								
編集機関	福岡市教育委員会								
所在地	〒 810-8621 福岡市中央区天神 1 丁目 8 番地 1 号 TEL092-711-4667								
発行年月日	2011 年 3 月 18 日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因	
なかいせきぐん だいわやくにじゅう ななしにとうき 那珂遺跡群 第 127 次調査	福岡市博多区 竹下 5 丁目地内	市町村	遺跡番号	40132	1006	33° 34' 11'' 130° 26' 06''	20100419 ～ 20100615	434	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
那珂遺跡群 第 127 次調査	集落	弥生時代中期 中世前半・中世後半 近世	弥生時代・土坑 中世一土坑・溝・井戸 近世・溝	弥生土器・土師器・須恵器 瓦・輸入陶器・瓦器 石製品・黒曜石剥片など	とくになし				
要約	<p>那珂遺跡群は、福岡平野を北流する御笠川・那珂川などの中小河川によって形成された、南北につらなる中位段丘面上の上に立地しており、本調査地点は那珂遺跡群が立地する台地のほぼ中央にある。遺構面である鳥栖ロード・層上面の標高は、南側で 7.2 m、北側で 6.7 m をばかり、南から北へゆるやかに傾斜する。</p> <p>本調査地点は、以前は宅地として利用されていたため遺構を中心に埋乱が著しく、遺構の残存状況は良くない。また、本調査地点は、遺構が密集する周辺よりも低い地形にあたることから、そもそも遺構密度はうすかつたようである。このため、検出できた遺構は周辺調査区に比べて少なく、そのほとんどは調査区南半に集中している。具体的には、弥生時代土坑 5 基、中世の土坑 2 基・井戸 2 基・溝 4 条が挙げられる。このうち、弥生時代の立柱状遺構とおもわれる SKO および中世の濠とおもわれる SD02 は、周辺の調査成果に連して注目される。遺物は、これらの遺構を中心にコンテナケース 2 箱分が出土した。</p>								

那珂 58
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1121 集
 那珂遺跡群第 127 次調査報告
 2011 年 3 月 18 日 発行
 発行 福岡市教育委員会
 印刷 正光印刷株式会社

の屋敷地を開む濠として機能していたと指摘されてきた。

しかし、本調査地点で検出された SD02 は、当該期の城館の典型例としてとりあげられる、有田遺跡群、御笠の森遺跡などで検出された方形区画構と異なり、方形を指向することはない。また近辺に掘立柱建物や地下式土壙などをともなうわけでもない。このように、SD02 と共通の特徴をもつものには、ほかにも 114 次調査や 26 次調査 SD02 などが挙げられ、中世後期に位置付けられる大溝には、屋敷地を囲む壕だけではなく排水などの別の機能をはたしていたものもあったようである。

その一方で、113 次調査 SD01・75 次調査 SD01 などのように、矩形に溝が検出され流水の痕跡が確認されない空濠も存在する。これらの溝の内側には、出土遺物量が少ないとことから、明確に濠にともなうと認定できる掘立柱建物などの遺構を認定しづらい状況にあるが、城館の典型例に近い特徴をもっているといえるだろう。また、19 次調査 10 に連続する 105 次調査 SD18・65 次調査 SD01 や、32 次調査 SD1001・1010 などは、直線的に 40 m ~ 60 m 程度検出されている溝であり、略正方形を意識して掘削されたと考えられ、より大きな規模の土地境界などの意味をもった区画溝である可能性も考えられる。

このように、現時点での調査成果を整理すると、那珂遺跡群において中世後期に掘削された大溝には、さまざまな機能をもつ溝が含まれている可能性があることがわかる。中世後期の遺構は、出土する遺物量が少ないとめ時期がしぼりこめず、同時存在した遺構を認定しづらいため、中世後期における那珂遺跡群の歴史的景観は判然としない。しかし、調査次数をかさねれば、溝と溝とのつながりや切りあいなどから、解明の糸口がつかめるかもしれない。今後の調査の進展に期待したい。

[参考文献]

- 荒牧 2008『那珂 49 -那珂遺跡群第 113 次調査報告-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 982 集 福岡市教育委員会
- 田崎博之 1998 年『福岡平野における弥生時代の土地覆被の利用と開拓』『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会
- 林潤也・平島義孝編『御笠の森遺跡 II』大野城市文化財調査報告書 65 集 大野城市教育委員会
- 山崎龍雄 2009『福岡市有田遺跡の戰国期曲輪状遺構について』第 9 回北部九州中世城郭研究会資料